

●演習ワークシート

事例 1

症例：65 歳，男性

現病歴：5 年前から高血圧で加療中。しばしば内服忘れを繰り返し，服薬アドヒアランスは不良。
本日トイレで突然の冷汗を伴う激しい胸痛を自覚し，救急要請となった

来院時現症

意識	呼吸数	SpO ₂	血圧	脈拍数
清明	30 回/分	99% (救急車内鼻カニューレ O ₂ 6L/分)	180/102mmHg (左右差なし)	98/分 (整)

眼瞼結膜：貧血なし，黄疸なし，頸部血管雑音なし，口唇：チアノーゼなし

心音：I 音，II 音，正常，心雑音なし，肺音：う音なし

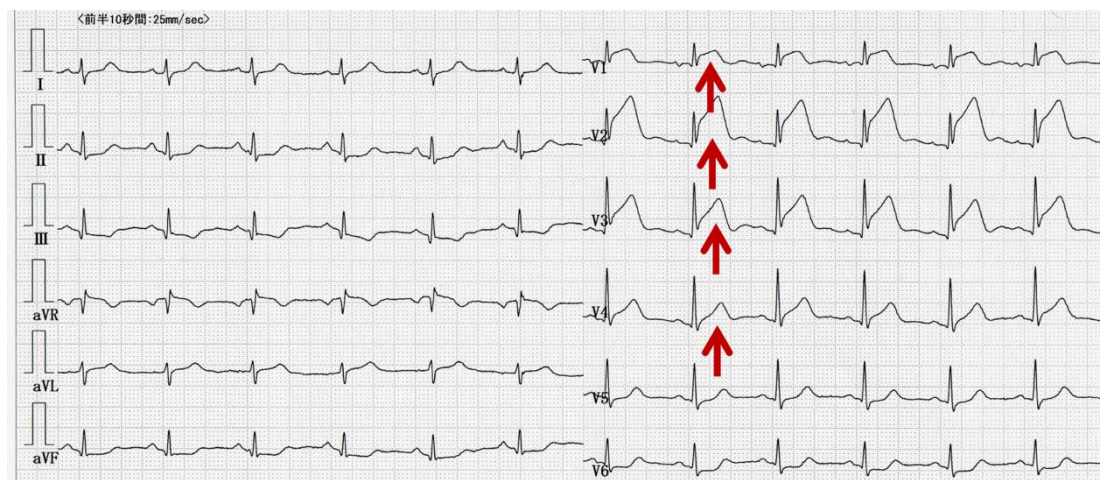
腹部：平坦かつ軟，腹部腫瘤の触知なし

下肢：浮腫なし

血液検査

WBC	14400 / μ L	TP	7.0 g/dL	Na	142 mEq/L
RBC	474 $\times 10^4$ / μ L	Alb	3.9 g/dL	K	4.0 mEq/L
Hb	13.7 /dL	T-Bil	1.2 mg/dL	Cl	101 mEq/L
Ht	42.1 %	AST	65 IU/L	CRP	2.52 mg/dL
Plt	16.6 $\times 10^4$ / μ L	ALT	40 IU/L		
		LDH	482 IU/L		
		Amy	85 U/L		
		BUN	22.0 mg/dL		
		Cr	0.93 mg/dL		
		CPK	2450 U/L		

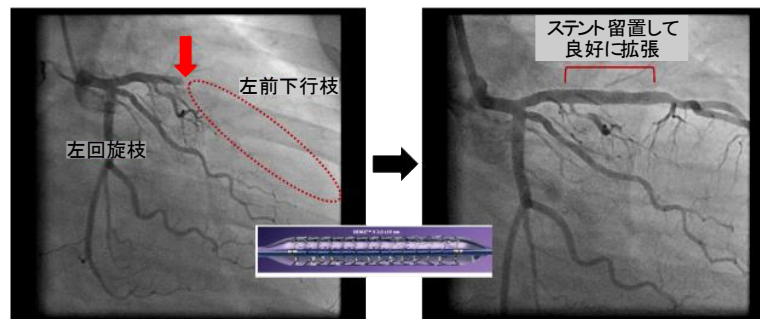
心電図検査



V1-4 誘導に ST 上昇を認め急性前壁中隔心筋梗塞と診断

●演習ワークシート

左前下行枝が責任病変の急性前壁中隔心筋梗塞



責任冠動脈の左前下行枝を再灌流してステント留置

XIENCE ステント写真提供 : Abbott vascular Japan

経過：

術後は集中治療室に入室。入室時血圧 178/106mmHg と高値のため、降圧薬による持続点滴を開始した。意識レベルは清明，胸痛なし。収縮期血圧 130～150mmHg に管理する方針となった。降圧剤の持続点滴としてニカルジピン（ペルジピン[®]）を使用した。

手順書

持続点滴中の降圧剤の投与量の調整

【当該手順書に係る特定行為の対象となる患者】

1. 血圧が維持されており、その他のバイタルや意識レベル、呼吸状態が安定している患者

病状の範囲外

不安定
緊急性あり

担当医師の携帯電話に直接連絡

【看護師に診療の補助を行わせる患者の病状の範囲】

- ☐ 意識障害、新たな神経症状の出現、胸痛、呼吸困難の出現なし
☐ 血圧以外のバイタルサインの変動なし
☐ $130 \leq \text{sBP} < 180$

病状の範囲内

安定
緊急性なし

【診療の補助の内容】

持続点滴中の降圧剤の投与量の調整
(何 mL/時 減量もしくは増量するかは各施設の判断による)

【特定行為を行うときに確認すべき事項】

- ☐ 意識状態、自覚症状の悪化
☐ バイタルサインの悪化^(注)

上記のうち 1 項目でも該当すれば直ちに医師に連絡

担当医師もしくは当直医に直接連絡

(注) 血圧の目標値 (ただちに医師に報告すべき値) の設定については原疾患により異なるので患者を特定した際に担当医師により記載しておく

【医療の安全を確保するために医師・歯科医師との連絡が必要となった場合の連絡体制】

担当医師、夜間もしくは休日は当直医

【特定行為を行ったあとの医師・歯科医師に対する報告の方法】

1. 担当医師もしくは当直医の携帯電話に直接連絡
2. 診療記録への記載

●演習ワークシート

演習日： 月 日

研修生番号：

研修生氏名：

事例 1

演習課題 1 下記の状態にある場合、手順書に従って降圧薬の投与量の調整を行えるか考察してください。

- 意識障害なし
- 胸痛なし
- 呼吸回数 35 回/分、息苦しい
- 収縮期血圧 160mmHg

演習課題 2 下記の状態にある場合、手順書に従って降圧薬の投与量の調整を行えるかを考察してください。

- 意識障害なし
- 胸痛なし
- 呼吸困難なし
- 血圧以外のバイタルサインの変動なし
- 収縮期血圧（sBP）160mmHg

演習課題 3 手順書に従って持続点滴中の降圧剤の投与量の調整について、特定行為の内容を記載してください。

●演習ワークシート

演習課題 4 下記の特定行為の実施・患者状態にある場合、手順書に従って降圧剤の投与量の調整後、次にどうすべきかを考察してください。

ニカルジピン（ペルジピン®・10mg/10mL/A）
 ニカルジピン原液 5A 1γ = 3mL/時
 （※10 倍希釈で投与するときは、原液投与量から×10 で換算して投与）
 血圧 130～150mmHg にコントロール
 0.5γずつ増量または減量 最小量：中止 最大量：10γ

- ニカルジピン 0.5γ 増量
- 収縮期血圧 120mmHg まで低下
- 胸痛はないが、少し息が苦しい
- 心電図は異常なし

演習課題 5 下記の特定行為の実施・患者状態にある場合、手順書に従って降圧剤の投与量の調整後、次にどうすべきかを考察してください。

- ニカルジピン 0.5γ 増量
- 血圧 140mmHg まで低下
- 意識状態、自覚症状の悪化なし
- バイタルサインの悪化なし